

私たちの日常。それは多くの営みの連なりである。
普段、それぞれの行為の意味を考えることは少ないが、ふと立ち止まって考えてみれば、そこには偶然と必然が潜んでいることに気づく。

呼吸。そのような自然な行為ですら、太古における偶然と必然の産物であったといえるかもしない。

この「ひと呼吸」が、手に取った人の日々の呼吸（營み）を見つめ直すきっかけとなり、そして、それぞれの日常の中での「ひと呼吸（休息と起点）」になれば嬉しい。

ひと呼吸

#1 Okada Norikazu

#1 Okada Norikazu

Interviewer / Text Murata Jun



村田 今回の企画の第一段ということで、私自身もどうなっていくのかわからないところ

がありますが、とにかくお話を聞いてみたい
人にインタビューするというシンプルな考え方
方で、初回は岡田さんのところへやつてきま
した。

学生支援の分野をどのように見ていているのか、そして、最後にこの分野の展望みたいなところをお聞きしたいと思っています。

日々の積み重ねから
大学のフィロソフィーが変わる

大学のフイロソフィーが変わる
では、早速本題と言いたいところ

が、最初に聞きたいことがあります。岡田さんって、例えば、「ご自身のことを自己紹介してください」って言われたらどのようにお答えが多いのでしょうか。

岡田一言では難しいですね。でも、最初に思いつくのは、「どさ回りをしていますですかね。普通に言えばコーディネーターっていう説明になるんでしようけど、ちょっと自分ではしつくりこないところもあって。例えば、コーディネート業務のなかで何か配慮をお願いするときって、配慮依頼の文書を出すことが多いと思うんですけど、そこに何らかの権限や強制力を持たせて、「やる必要が

村田 すごく大切なことですよね。
岡田 それと同時に、大学のフィロソフィーを変えていなっていうのはあります。日々の細かいやり取りなどを通して、いつの間にか支援つてこういうものなんだっていうのを教員や周りのみんなが分かつていくような、そういうことを狙いながらやっています。自己紹介になつていなかもしれないけど、そういう意味では「どさ回りをしています」というのが当てはまるような気がするし、フィロソフィーや文化を変えるための仕事をしているっていう感じもあります。

村田 実務的なところのパフォーマンスをいかに高められるかに専念するだけではなく、フィロソフィーや文化などもえていくというところを意識できるかもポイントになるという感じでしようか。

岡田 そうですね。もちろん、まずは学生の

岡田 法的にも合理的配慮は義務。でも、やつぱり合理的配慮をする上でも、それ以前の基礎的な環境整備は大事なわけで、それが充実していくれば、その分、個別支援の必要性が減っていくと思います。環境整備は物理的なことだけではなくて、ファイロソフティークや霊園

思い、大学院に行けば何かが変わると思つて進学したら、今度は毎日のようにディスカッションじやないですか。もうこれは無理だ辛い!となつた。そんなとき、たまたまテレビで手話で話している番組を見て、「これなら話がわかるかも」と思つた。本当に偶然ですが、同じタイミングで手話サークルにも出

「大学時代も」と勉強したかた
という気持ち

村田 はじめてノートテイクを受けてみて、かがでしたか？

岡田 何年だろう。早稲田で大学院生をやっていた時が最初で、学生と並行してアルバイトをするようになって何年くらいになるんですか？

間って何たてんたるうて思いました。これから色々なことを勉強して、聞こえない音たちもできて、情報保障についても色々と知

きつかけは何だつたんですか？
岡田 今思い返すと本当に偶然です。たまたま

事にでもたらいいなって思った。

で、ある種の信頼というか、教員もハックンアップしているという気持ちを持つていていただけます。そうすると、こちらから頼んでいなくても、教員のほうから支援のことを連絡して

了。大学院進学後に偶然知ったナノトテイクに衝撃を受け、自身も支援を利用するし始める。日本財団「聴覚障害者海外奨学金事業」の助成でアメリカに3年半留学し、高等教育における障害学生支援プログラムの管理運営等を学ぶ。都内私立大学を経て、2014年より現職。

さてくれたりする。そういう積み重ねで、少しづつ大学全体の考え方であったり、フィロソフィーが変わっていくのかなって思いますね。

村田 学生のためにやっていることが、教員の意識を変えて、それがまた学生のメリットとしてかえってくる。短期的な変化ではない

害者海外奨学金事業」というのが始まつてアメリカ留学のチャンスがあつた。結果的に

は第三期生として行かせていただきました
それで帰国すると、今度は帰国するタイミン
グで前の大学にご縁をいただいた。その後
退職していた時期に今度は本学と縁ができる
ここに至ります。なので、本当に今振り返る

るでしようけど、それはそれ。だって他の学生たって波はありますよね。なので、ある面では放つておく。もちろんきちんと気にはかけますけど。これって実際には本当に難しいと思いますが、このあたりが、大学における障害学生支援という領域の一つのキーかなと思います。

代もつと勉強したかつたなあ」っていう気持
ちですかね。今でも一年生を見ると羨ましい
ですもん。自分も授業受けたいなあつて。だ
から、支援現場の確認という名目で授業を見
に行つたりするのはちょっと楽しみです（笑）。
でも本当に今でも、機会があればどこかの学
校へ入つて勉強してこつて、一歩跨いだら

部に入って勉強したいっていう気持ちはある
ますね。

学生支援って何を目指すものなのかが、少し見えてくるような気もしますね。

個人偏の「律」。つまり、その状況に対し、自分で考えて動ける人を育てる、動くための、あるいは卒業後に動けるようになるためのサポートをするのが障害学生支援だと思っています。もちろん、大学として法律を遵守したり、やるべきことはちゃんとやるんだけど、やっぱり最後は学生本人がどう考え、どう動かす、どう巣立っていくかというところが大切だと思います。なかなかバランスが難しいと感じますが、べったりサポートするのではなく、ましてや支援者が自分の手の上に常に置いておいて、メンタル面も含めてネガティブなことを周りが取り除いてあげているというのではありません。逆に、学生の希望をそのまま飲み込むのでもなく、程よい距離感で

景としている領域。これはもちろん大事です。もう一つは、自分が属している組織や『大学における障害学生支援』という場。前者のみに忠実であるならば、確かにその領域の専門家かもしれないけど、「大学における障害学生支援職」ではない。そうなると、時には自分の専門家としての考え方や想いと、自分のいる組織のそれとが一致しないこともありますよね。そうしたときには難しい判断を迫られることもありますが、やはり前提としては両方を考えて、両方に責務を果たさないといけないと思います。その意味からも、おっしゃるように、コーディネーターが継続的に責任を果たしていくことができる立ち位置にあると、うことは、必要だと思います。

觉悟をもつて関わり合う

岡田 最後にちょっとだけ質問なんですが、岡田さんって、どんな風にリフレッシュしたり、一息ついたりしているんですか？

岡田 うーん、難しいけど、頭を使わないことじゃないですかね。最近は、入ってくる情報に対して常に頭が動いている感じで休まず、結構しんどいんですよ。だから本でも良いし、映画とかも好きなんですけど、見たものや聞いたもの、言われたことに対しても何のリアクションもいらないような、100パーセント受身の自分でいられる時間を作れると、結果として随分リフレッシュできます。

意外とそこからふとアイデアが生まれたり、ヒントが出たりするので。あ、結局頭を動かして いますね（笑）。



Editor's Note

2018年10月。岡田さんのインタビューのために明治学院大学の白金キャンパスを訪れました。品川駅から起伏に富んだ住宅街をするすると通り抜けると、20分ほどで趣のある正門に到着。丁寧に整えられた芝生とチャペル（礼拝堂）に大学の雰囲気を感じ取りながら、岡田さんが待つオフィスに向かいました。

岡田さんのことは何年も前から知っていましたが、ちゃんとお話をするまでにはしばらく時間があったように思います。ここ2~3年ほどで少しづつ接点も増えて、障害学生支援についてお話しする、そして時には一緒に夕食を楽しむような間柄になりました（岡田さんがどう思っているかはさておき）。

雑談のような雰囲気のインタビューのなかでも、岡田さんの想いや考えは明確に現れます。そして、それは一貫したものであるからこそ、何度も。今回のインタビューで岡田さんの全てを切り取れたとは到底言えませんが、インタビューが終わった後でも、情報保障について熱心に語る姿が、岡田さんのこの仕事への向き合い方を表しているような気がしました。

とても小さな記事ですが、一人でも多くの人と共有され、そしてこの分野にいるみなさんの記憶にとどまっていくことを願っています。

(村田淳)

Concept

障害のある学生が高等教育にアクセスする権利を保障するための取り組みである「障害学生支援」には、その主人公である学生と対話し、ともに行動してきた多くの実践者たちの存在があります。こうした実践者一人ひとりには独自のバックグラウンドがあり、またそれぞれの考え方や想いをもって形作ってきた歴史があります。

私たちは、これらの「人」によって蓄積されてきた考え方やその想いを知ることが、これから障害学生支援を考えていく上で貴重な機会となり、この分野の魅力を知ることにつながると考え、この『ひと呼吸』を発行することにしました。ここに綴られているのは、私たちを含めた一人ひとりの関係者にむけた応援のメッセージです。

ひと呼吸・編集委員会（HEAP×Kyoto Univ.DSO）

村田淳、船越高樹、宮谷祐史、木谷恵

HEAP：高等教育アクセシビリティプラットフォーム

Kyoto Univ.DSO：京都大学 学生総合支援センター 障害学生支援ルーム

発行／高等教育アクセシビリティプラットフォーム（HEAP）

Address 京都市左京区吉田本町

京都大学学生総合支援センター内

Web <https://www.gssc.kyoto-u.ac.jp/platform/>

Mail d-support-pfm@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

Tel 075-753-5707